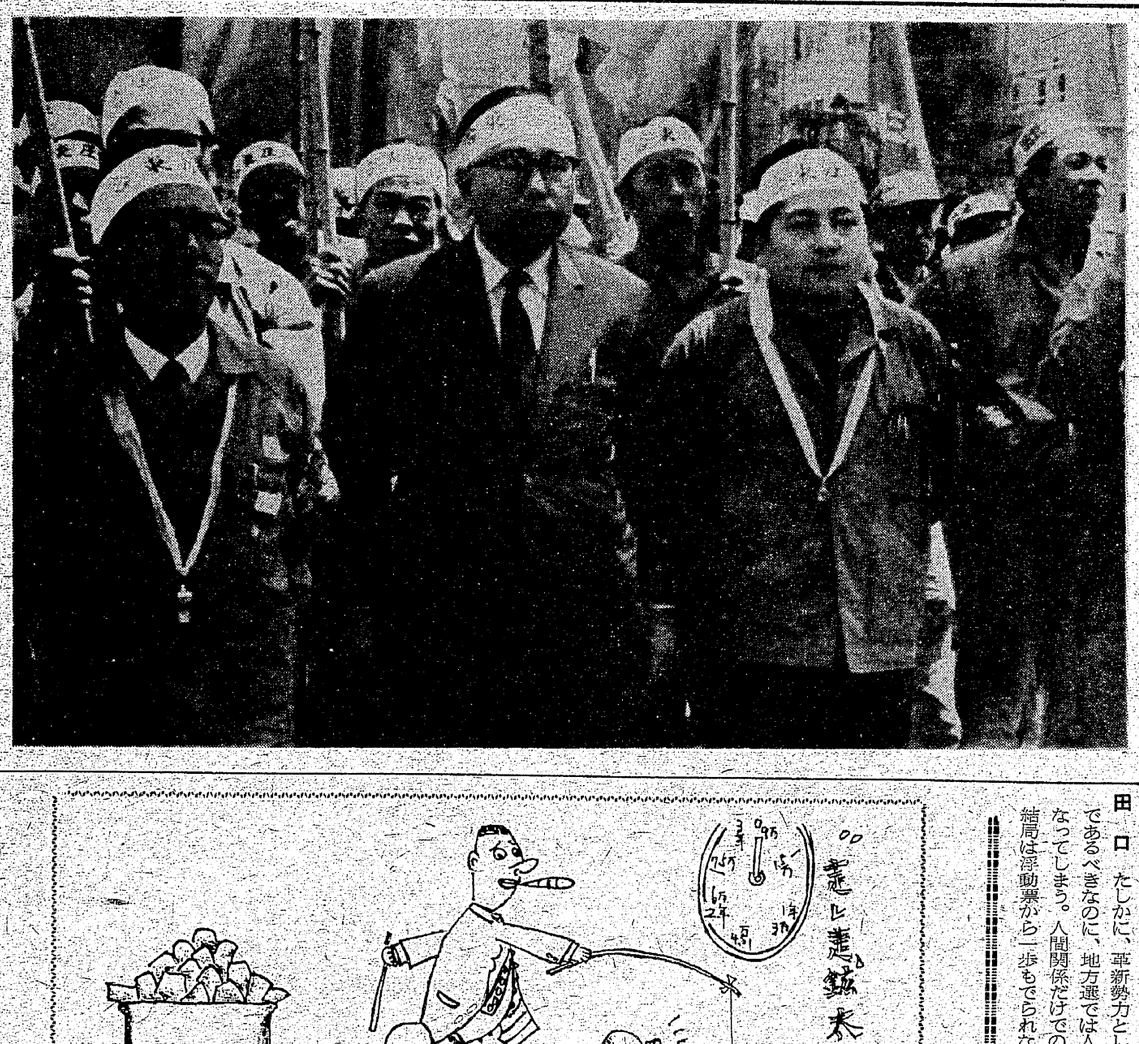

地域の人々と共

座談会「統一地方選

浮動票をどうする

田口　私は選対で企画・組織を担当してきましたが、浮動票のことでつくづく思い当たりました。この浮動票を、革新の方にどう向けるか。「前回は保守にいれましたけど……」という票をもっと重視することです。話し合って見ると、保守が県市政の中でどんなことをやっているのか、まったく知らないんですよ。

得票は限界では…

森　私の任務は点検でした。その中で停年退職者の家をたずねたときのこと――「げんかときばかりきて……」とあやまると、「何ばいうな。げんかときこそきてくれんなら……」とはげまされました。これからは、こんな人たちこそ、見つめていかなければならない、と思ったわけです。山根さんからも話にでましたように、三池の候補者同志での票の食い合いが目につきましたが、いまの選挙体制での伸びは限界ではないですかね。

許せぬ三井の支配

東　でも三井が支配している以上、それと闘うに票は伸ばさねばならない。それにはタテ割り体制から脱却して、一日も早く横断組織を確立すること。私はこんど校区選対の責任者として川口候補のために活動しましたがそのことをつ

大牟田市長選挙に、統一候補として闘った川口さんに、三井東圧化学は退職強要。それは、化学労働者の怒りのデモとなって燃えあがった。写真は働く者のスクラムで守られている川口さん

は、革新候補を一人でも多く当選させるために、どんな計画をもってのぞんだのだったか。そこが聞きたいわけです。旧人候補の中で新人候補をかかえて、しかも社会党や組合に対する問題もいろいろいわれているのですから、それらを克服してどう当選させるかが悩みだったんです。

市民は待っていた〝革新〟の手

渋田　多くの市民は、むしろ革新からの働きかけを待っている事実が明らかにされましたが今のタテ割り体制ではその市民にこたえるにも限界がある。では、どうすればよいのか？

票は四年間の総括

大野　浮動票という問題が出されていますが

打ち破れ候補者中心

主体は地域の運動だ

渋田　輸入候補の感じを与えたこと、地方選挙の意義は何か、の把握もなかった。ということがあるにもせよ、一点――組織がこれから運動をやるべき主体で、日常活動の積みあげこそが基本だ――ということがハッキリしたわけですか？

ねじまげられた方針

東　こんどの地方選挙を通じて、横断組織づくりの糸口でもつかもう、というのが一つのねらいだったはずなのに、中盤になるとそれがねじまげられていってしまったんです。結局は立候補者中心のタテ割りが、十分破れずに終わってしまいました。

田口　たしかに、革新勢力としての発展が先であるべきなのに、地方選では人間関係が先になってしまう。人間関係だけでのつながりは、結局は浮動票から一歩もでられないですよ。

人間関係は保守の専売特許で、いろんなボスを通じて地域全体を保守の人間関係がつかまえている。それをうち破るには、地域での労働者の普段の組織活動以外にはないですよ。どこにだれをもってきても、悩みを克服してゆくことが大切ですよ。

森　私たちは働きかけるにも、まず市長のことを訴えてから、次に市議をお願いしますと、たしかにはじめのうちそうやっていましたが、後になると「市長のことはいうてくれるな。市議のことだけいうてくれ」となっていったでしょう。おかしいと思いましたね。

大野　だれをつれてきても当選させるゾ、の校区体制こそ基本です。候補者をきめんと運動にならんでなく、校区の運動が候補者をきめるところまでの組織づくりこそ、何より大切だと思います。

忘れられた組織固め

山根　ま、よかった点といえば、他単産の活動家たちと交流できたこと。革新候補全員当選可能の地盤割りをやっていながら、一部の候補が票を食い荒らしたために、落選させた事実は恥ずべきですね。

大野　その責任問題は、どこに所在しているのか。かといって何とかして当選させたいのが願いでやられたんだし、第一校区外での運動はやるな、はなかなかできんことですね。

山根　合同選対の権限が問われはせんですかね。組織固めが一つの目的のはずだったから。

大野　その組織が、うちではかえってうまくゆかないこともありました。顔をよく知らない候補で闘う悩みもありましたが、それでもがんばってやりましたが。

渋田　ところで大牟田、荒尾でみられた企業選挙は、みにくいばかりでした。例えば大牟田に親が住んでおり、子供が東京に就職しているときなとは、そこの会社の社長の名前で親元に手紙を出して、「お宅の息子さんが働いておられる当社では、福岡県知事、県議、大牟田市長大牟田市議には、つぎの方を推せん決定しました」として、金部会社、同盟系の候補者の名前を書き、その上返信用ハガキまで同封して確認を強要するという例もありました。これは自民党支配体制維持のために、いかに会社側が必死になったかの証拠ですが、各地域でもどんな手が打たれたかを出しあって下さい。

新労はカンづめ戦術

大野　とくに荒尾では、新労組員へのしめつけがひどかった。新労から荒尾市議に出たH候補は、新労組員のなかでも人望がまったくなく坑内で聞く新労組員の話も「もう、あん人は確実に落ちるバイ」という声ばかりでした。だからあわてた新労組幹部と会社側は、投票日の五日くらい前からシメつけを極端に強化してきたんですよ。例えば会社から帰ると、社宅にまでは帰らせずに、地域の集会所に集めて飲ませ食わせ。家に帰らせれば、三池労組や町方の候補者がくいこむので、こわかったんでしょう。その候補者はいよいよ金が足らなくなって、「会社から五十万、組合から七十万円もらったが、それでも足りないので共済会を借らにゃいかん」とボヤいていたという話でした。

山根　四山のある地域では、地域ぐるみ全員を不在投票させて、そして投票日は旅行にゆくんだといって、バスで旅館につれてんだという

東　理屈じゃなく、どうやるかの気がまえでし

恥知らずな企業選挙

破れた新労のカン詰戦術

ことさえあったようです。こんなにシメツケても、新労組の票で実際に、新労組や会社の候補に入ったのは約五、六〇パーセント。残りは一部が町方の、他は三池労組にきたと私は分析しています。

内と外とは大違い

田口　大牟田市議に宮浦の新労組から出たM候補は、新労組の青年にそろいのユニフォームを着せて宣伝していたが、新労組合員の話しでは「おれどんなMには入れんばい」という。それなら誰に入れるかと聞いたら「それは運尾と湯村（いずれも三池労組公認）に分けて入れなんたい」といっていました。

大牟田での三名の三池労組候補者の票が、予想を大きく上回ったのも理由があることです。

渋田　今回の選挙で感じることは、三井の企業選挙、物量作戦はすさまじかったですが、同時にその限界もハッキリしてきたということですね。今後の四年間、私たちは地域組織の主体を強めて住民運動を強化してゆかなければならないことを、義務として確認したわけです。今日はどうも、ありがとうございました。

春闘、決戦段階に

各労組、ストを集中

日経連など経営者側の賃金抑制策と対決し、例年になく長期化した71年春闘は「誰もが1万円以上を獲得するまで闘う」ことを合言葉に、メーデーを越えても力強く闘われているが、各単産が最大限のストライキを構えて追い上げるなど、いよいよ春闘は決戦段階をむかえた。

宮浦指導部6分会新聞〝すぱーく〟（No.16）から

今では『楽しみに』

〝三川はぐるま〟の松田さん

三川

去る十日、三川指導部は〝職場新聞編集者会議〟を開催、まずこれまでの経験を率直に交換し、意見をだし合い、そしてこの活動を今後いっそう発展させるためにお互い努力しよう、と固く誓い合った。

その中で、同指導部九分会（坑外職場の一つ）新聞〝三川はぐるま〟の編集者の松田忠博さんの経験報告は、集まったみんなにとく

これは〝はぐるま〟の37号

べつ感銘を与えたが、その発言の要旨を、すべての職場新聞活動者のために紹介しておく。

×

編集委員会が形ばかりはありますが、まず分会長と編集方針について話し合ったあとは、企画・取材・記事作製・割付・ガリキリ・印刷まですべて私一人でやっています。

私に職場新聞活動のやる気を起こさせてくれたのは、立願寺での編集実務者集会でした。

「よし」というわけでやりだしました。だが、いくら「読んでくれ」と願っても、折角配る新聞がはじめはなかなか読んでもらえませんでした。

そこで、私はどうするかを考えました。考えに考えた末、「おら」が職場」欄と、「オス」欄をもうけたわけです。

私たちの分会こそ一つでも、職場は五つ。お互い仲間が働いているほかの職場も、仲間もあんまり知らないので、この二つの欄で心を結ぼうと思い立ったわけです。

やってみますと思わぬ職場の違いや、保安問題をさぐり当てることになり、仲間にもいろんな人があることがわかったのです。そのままを、二つの欄で紹介していったわけです。

中でも「オス」欄には、紹介者の似顔絵を必ず添えるのですが、それにはまず対象者から写真を借りる。それをもとにノートに似顔を二十～三十描いて見る。その中から一番似ている絵をとって、それを敷いて原紙に映しとる。そして、できあがる。

この二つの欄がはいったところが、はじめてみんなが読み出してくれました。しかも、似顔絵は似ていても似ていなくても話題になることがわかりましたので、もうこの頃はとくべつ似せようともしませんが。

私は文章はヘタクソですから、だから自分の文章はなるべく書かんですむように、一人ひとりの仲間の声をそのまま紙面にぶっつけることにしています。それがまた話題を呼ぶ。

というわけで、この活動には苦労がありますが、いまでは自分の楽しみの一つともなってしまい、一生懸命夜のふけるのも忘れて、家でガリをきっています。